



創立30周年記念盤

Mieko Nishijima

西島三重子ライブ

SIDE 1 1. SEQUENCE OF MEMORIES ～思い出のページ 4'21"
作詩:平野 肇 作曲:西島三重子 編曲:服部克久 「SHADOW、ニューベストより」

2. エピローグ 「SHADOWより」 4'45"
作詩:平野 肇 作曲:西島三重子 編曲:佐藤正美

3. かもめより白い心で 4'44"
作詩:門谷憲二 作曲:西島三重子 編曲:長谷部 徹

SIDE 2 1. CAMINITO 「ベルソナより」 3'34"
日本語詩:大津あきら 作曲:Juan De Dios Filiberto 編曲:長谷部 徹

2. LA CUMPARSITA 2'41"
作詩・作曲:G.M.Rodriguez 編曲:長谷部 徹
ロマンひとよ

3. 浪漫一夜 「寝物語、ニューベストより」 3'12"
作詩:平野 肇 作曲:西島三重子 編曲:長谷部 徹

4. BON-VOYAGE 「SHADOWより」 3'02"
作詩:大津あきら 作曲:西島三重子 編曲:美野春樹 弦編曲:長谷部 徹

SIDE 3 1. ノンシャラン 「寝物語より」 3'01"
作詩:平野 肇 作曲:西島三重子 編曲:松井忠重

2. サライ・サライ・サライ 「寝物語より」 3'52"
作詩:竜 真知子 作曲:西島三重子 編曲:松井忠重

3. 池上線 「ニューベストより」 3'47"
作詩:佐藤順英 作曲:西島三重子 編曲:馬飼野俊一

4. 千登勢橋 「ニューベストより」 3'59"
作詩:門谷憲二 作曲:西島三重子 編曲:馬飼野俊一

SIDE 4 1. 流されて 「寝物語、ニューベストより」 3'41"
作詩:門谷憲二 作曲:西島三重子 編曲:青木 望 弦編曲:長谷部 徹

2. 冬のカルナバル 「冬なご、ニューベストより」 5'10"
作詩:大津あきら 作曲:西島三重子 編曲:佐藤正美 弦編曲:長谷部 徹

3. そうよ SMILE AGAIN 「SHADOWより」 6'13"
作詩:平野 肇 作曲:西島三重子 編曲:服部克久 弦編曲:長谷部 徹

STEREO DOR-0154・55

DAMP PC

愛蔵家No. 000126

並みのライブ盤と違う、ナチュラルなアコースティック・サウンドが楽しめる。

曲の解説とききどころ/小林 貢

一昨年この企画に登場した『西島三重子 76/45』は、歌と演奏を同時に録音した作品でオーディオファンを楽しませてくれた。その西島三重子の都市センターホールに於けるコンサートが2チャンネル同時録音で再び登場することになった。今回もアコースティック楽器を主体として、エフェクター類は最小限にとどめてナチュラルなアコースティックサウンドが楽しめる。また、本企



画ではいつも新しい試みが盛り込まれており、今回はカッターヘッドに挑戦している。それは従来のノイマンSX-74のドライブコイルとフィードバックコイルをMC-OFC (Mono Crystal-Oxygen Free Copper) 線で手巻きした改造ヘッドを使っているのだ。しかもその作業は、オランダの物理学者で特殊形状の針先の開発者として知られるヴァンデンハル氏に依頼したもので、今回の試みは大いに興味を引かれるところだ。

*SEQUENCE OF MEMORIES

～想い出のページ

オープニングを飾るのは『SHADOW』に収められていたナンバー。若き日の想い出をゆったりとした時の流れを思わせるテンポで歌っている。ピアノをLチャンネル、ベースをセンター、アコースティックギタ

ーをRチャンネルに配しドラムスは大きく広げられ、この音場の中から透明感のあるボーカルが浮き上がってくる。パーカッションの粒立ち、定位、ギターの瑞々しい響きも印象に残る。

*エピローグ

愛の終りを歌った曲であるが、主旋律はボサノバのリズムで暗さは感じさせない。ガットギターのみをバックにヴァースが歌われる。ギターの低音弦の響きの豊かさ、ボーカルの微妙なビブラートなどディテールの表現力の高さはきかせどころだ。また、インテンポ後のドラムスの量感やギターのコードのピュアな響きも並みのライブ盤とは違うことを実感させられるところだ。

*かもめより白い心で

青い空と海を飛翔するかもめの姿にオーバーラップさせ女心を歌ったナンバーでフォルクローレ風の曲想が印象深い。力



強いビートは、最内周の曲だけにカートリッジのトレース能力のチェック、LチャンネルのタンバリンとRチャンネルのギターはトランジエントと定位感の確認に役立つはずだ。

*CAMINITO (カミニート)

1923年に作曲された有名なタンゴの名曲。昔は恋人と歩いた小径へ一人で別れを告げに来た心情がつづられている原曲の内容を尊重した日本語詩がつけられている。バンドネオンと弦が加わり、奥行きと広がりのある音場に軽やかなリズムに乗って主人公の哀しい心情を歌う彼女の澄んだ声が浮き上がる。音場感の正確な再現、バイオリンの艶やかな響きに注目したい。

*LA CUMPARSITA (ラ・クンパルシータ)

これも有名なタンゴの名曲で1917年に発

表されている。多くのアーティストに採り上げられてきた名曲に彼女は原語で挑戦している。こういう曲こそ実力が求められるものなのだが、高い歌唱力を持つ彼女ならではの選曲である。張りのある歌声、繊細なバイオリンと力強いリズムを刻むバンドネオンの対比、ボウイングによるベースの量感が聴きどころとなるだろう。



ロマンひとよ
*浪漫一夜

タンゴ風のリズムに乗って歌う恋の歌で、バンドネオンとピアノによる抑場のある躍動的なリズムを正確に再現するにはシステムに反応の良さが要求される。この曲も、ベースはボウイングで演奏されているが音像の輪郭がはっきり出ないようだ。低域の分解能不足と言えるかもしれない。メリハリのあるバックのリズム、滑らかなバンドネオンと弦のフレーズ等、音楽的な表現力の高さがシステムに要求されそうだ。

*BON-VOYAGE

軽やかなワルツのリズムに乗って歌うシャンソン風の曲。さり気なく歌っているようだが情感豊かに歌われていて印象的だ。イントロでの弦とフルートのユニゾンでその両者が明確に分離するかどうか、Lチャンネルのトライアングルの明瞭さで分解能のチェックができる。



*ノンシャラン

低音のビートが効いたミディウムバウンズに乗った陽気なシャンソン仕立ての曲。低音のリズムが強調されても各楽器の音がクリアなのはキックドラムのみエレクトロニクスドラムを使用したミキサーの配慮が功を奏したもので、低域のダンピングを



知るのに役立つだろう。フルートがセンターより少し右奥、カウベルがLチャンネルに正確に定位しているかで音場感のチェックができる。

*サライ・サライ・サライ

オリエンタルムードを漂わせるイントロに導かれ、蜃気楼のように消え去った恋を歌っている。この曲もベースが量感のある弾力的なトーンで録られているが使用マイクの選択が良かったのだろう、音像の輪郭が少しも甘くならない。フレーズの最後の



ボーカルのビブラートや微妙なブレスがきれいに出ていれば分解能に問題はないと考えてよいだろう。

*池上線

彼女の人気を決定的なものにした懐かしい曲。最初のワンコーラスを無伴奏で歌っているが、この部分の彼女の透명한歌声、エコーなど歪感のチェックに最適だ。しかし、それ以上に彼女の歌唱力の高さを実感するところでもある。ピアノの高域のフレーズでの輝き、ギターのリズムの鮮度の高い響き、伸びやかなベースの低音等チェックポイントが幾つかある。何回聴いても感動的な名曲だ。

*千登勢橋

『池上線』と同様に悲しい別れを哀感たっぷりに歌い上げている。重量感のある3拍子のリズムが使われ彼女の説得力のある歌唱がさらに生きてくるようだ。レトロ感覚の音色を使ったシンセサイザーが効果的だ。キックドラムとベースのビートは低域のダンピングやアンプのドライブ能力を判断するよい素材となるだろう。

*流されて

一昨年の夏にシングルカットされた曲で、これも3拍子で奏される恋の歌。弦の物悲し気な響きのオブリガートが印象的だ。後半の盛り上がるの部分では全パートが加わって感動的な終焉へと向かって行く。音場感や各セクションの配置が明晰に再現される辺りは本ディスクのクオリティの高さを物語るものと言えるだろう。

*冬のカルナバル

コンサートの最後はサンバのリズムが心地良い佳曲だ。彼女の澄んだ声がノリの良いサンバのリズムに溶け込むという印象だ。ピアノ、ギター、ラテンパーカッションなどサンバならではの雰囲気漂わせ、後半加わる弦の揺れるようなフレーズなどすべてが効果的でラストにふさわしい感動をもたらしてくれる。全パートが加わるエンディングのセパレーションの良さは改造カッターヘッドの効果と言えそうだ。

*そうよSMILE AGAIN

アンコールに应运て演奏されたのは『SHADOW』でもラストナンバーとして収められていた再会の歌で、しっとりとした感動を与えてくれる。弦の美しいフレーズ、優しさ溢れた彼女のボーカル、フルートのエンディングテーマなどが心の中に何時までも残っているようだ。



アルバム制作の現場を公開するような、緊張感あふれる収録でした。

レコーディングにあたって/小菅憲一

今まで西島三重子のアルバム制作は、歌とオーケストラを同時に録音する同時録音のポリシーを貫いており、今回のライブレコーディングはアルバム制作の現場を公開するような緊張感あふれる収録となりました。本番に先立って東芝 EMI の第3スタジオでリハーサルが行なわれ、全曲のスコア、歌詩にそれぞれのプレーヤー、楽器のソロ部分などのチェックを行い、歌詩はレコーディングメモでギッシリ埋まってしまうほどでした。

それでは、今回のライブレコーディングでの特徴をあげてみましょう。まず、ボーカルのエコーには AMS 社 Rmx-16 デジタルリバーブを使用し、彼女の声質にマッチしたアンビエンス効果を出し、リミッターは UREI 社の真空管式 LA-2A を使用し、ピーク時でもかかりすぎないような位にセットしました。ピアノには、Aphex 社のエキサイターを使用し、イコライザーで補正したものとは異なる独特な音色が聞かれると思います。

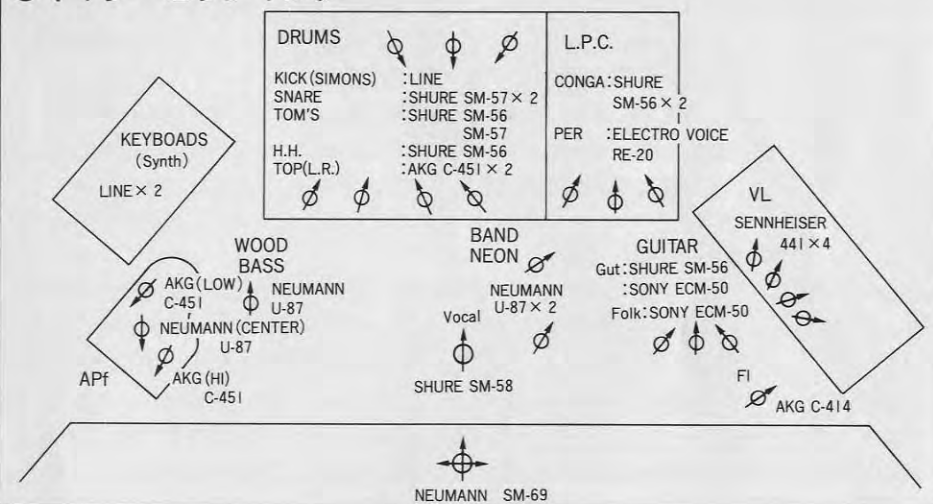
また、今回ドラムスのキックにシモンズのエレクトロニクスドラムを使用しましたが、アコースティック楽器の多い中で生の

バスドラムを使うと他のマイクへの回り込みが悪影響を与えるため、私の要望で変更してもらいました。とくに、近年のコンサート P.A. はご存知のとおり大音量化しており、今回のようにアコースティック楽器の多いライブレコーディングの場合は、ステージ上でのモニター音量が最大の難問題であり、満足の行く録音が望めなくなりつつあります。このような状況下、効果的な工夫をすること、新しいアイデアを試してみることも録音技術者としての役割だと思います。

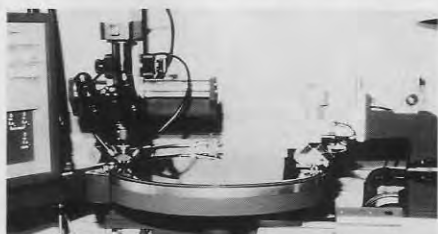
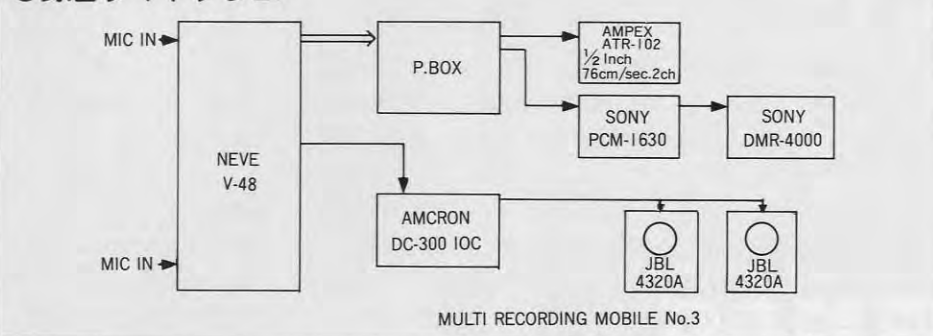
最後に、今回のライブレコーディングでの経験は、西島三重子にとっても新生面を発見し、私も新しい収録技術を発見した記念すべきレコードとなりました。



●マイク・セッティング



●録音ダイアグラム



DAMハイクオリティレコードについて

音楽パッケージもこのところ DAT をはじめ CD-V、CD-I 等、次々に新商品の開発が具現化し、ますます多品種化の傾向を呈しており、音楽プログラムに対するアプローチの仕方も更に多様化、より個性化すると思います。

今やアナログディスクは、完全にコンパクトディスクにその主流の座を奪われ、100年以上続いたアナログディスクと短期間のうちに世代交替したコンパクトディスクの優位性は、まさしく脅威的なものを感じます。しかし、話題に乏しいアナログディスクとはいえ、アナログならではの魅力と常に音の限界にチャレンジしても余りある可能性を秘めているディスクレコードは、尚一層興味と期待の大きいものがあります。DAM レコードは、一作毎に、マスタリングからメッキ、プレスに至る製盤の最新技術の導入を図り、常に限界とその可能性を求めて来た経過がありますが、VIP『ロマンス／徳永二男』でのガラス原盤を素材としたラッカーマスターを初めて採用した超重量200gレコードは、真に現状のアナログディスクの市場性とその背景を考えれば、一つの完成領域に到達したディスクであったと確信しております。今回の DAM レコードの特長は、その最高水準と確信する超重量200gレコードで採用した製造ノウハウと、更にコンパクトディスクやビデオディスクの周辺技術を導入することはもちろんのこと、特に新しい測定評価技術を採用することで従来とは別な観点での理論解析により音質改善の対策を進めて来た点にあります。一部の工程では、生産性を度外視した相当なリスクを覚悟で、手造り的な製造方法をとったり、まさしく音質重点主義で進めたアナログディスクの総力を上げ、チャレンジした私共の制作ポリシーをきつと皆様は理解して頂けるものと思います。

それでは今回の特徴を紹介いたします。

今回新しい試みとして、ディスクカッティングにおいて最も重要な部分である、カッターヘッドに注目しました。オランダのカートリッジ研究者であるヴァンデンハル(Vandenhul)氏に依頼して、ノイマン社製カッターヘッド(SX-74)のドライプコイル、フィードバックコイルを、MC-OFC (Mono Crystal-Oxygen Free Copper) 素材で手巻きした改造ヘッドを採用しました。ケーブル、ワイヤー素材による音質の違いについては、各種各様に論じられ興味ある点ですが、アナログディスクに残された貴重な試みとしてトライしてみました。

ディスクレコードの平面、平滑性は、音質へ影響する重要なファクターでもあり、総括的な意味で音溝波形の成形精度に集約されますが、今回の高品質化のポイントはこの点にあります。

アナログディスクの徹底した性能分析より、ビデオディスク成形の周辺技術を応用したプレス金型を新しく開発することからスタートした超重量200gレコードの製造技術とその設備を利用し、今回の150g重量レコード用プレス金型の精度や鏡面性を対処することで、ディスク面のストレス(歪)を最小限に押さえ込み、忠実な音溝波形を成形しています。更に

今回の特徴は、メッキ工程にあり、これはコンパクトディスクの製造ノウハウと設備を採用して、クリーンルーム処理を行い、従来に無い超精密な電解メッキにより、ラッカー音盤の音溝を忠実に転写し、雑音の少ないS/N比の良い原盤を作成しました。

今回は特にディスクの面精度を改善する為に、メッキ工程に於いて、スタンパー作成は高密度な電解メッキ方法と研磨仕上げとによって、優れた平滑性が得られています。

これらの改善により、真円性の大幅な向上とワウフラッターの影響を極力減少させることで、低周波数帯域による変調が少なく、全体の分解能が改善され、楽器の音程がより安定感のある響きと、強奏部での解像力も一枚ペールを剥したような鮮明さは、アナログディスクの魅力ともいえましょう。又、音像の実存感はまさしくマスターテープのもつオリジナルサウンドの世界だと思えます。

御存知のように、ステレオの音溝は、水平振幅は左右信号の和(L+R)、上下振幅は、左右信号の差(L-R)として録音カッティングされており、DAM レコードで代表されるハイクオリティレコードは、通常のレコードより+5dB程もハイレベルでカッティングされ、音溝幅の変化は、20 μ ~300 μ (L-R)程に達する位、高精度化しております。

例えば複雑な音溝になればなる程、その再生時に於いてはカートリッジの振動エネルギーが逆にレコード盤を烈振させ、レコードの固有共振によってその振動がカートリッジヘリアクションされ、クロストーク、セパレーション、歪等さまざまな音質劣化の要因になると考えられます。

共振はマスとコンプライアンスの積で表わされますから、レコードの固有共振はレコード重量を重くし、マス成分をコントロールすることで音質の影響の少ない帯域へ共振周波数を下げ、低域特性の改善を図っています。

レコード形状も再生条件を考慮し、今までのフラットレコード以上に精度の高いフラットプロフィールを採用致しました。このフラットネスの良さは、ターンテーブル・マットとの密着性を大幅に改善し、再生時に起こり得るレコードの共振がマットを介して逆にレコードへ、フィードバックされるこのリアクションを緩和させる効果があります。

この様な高密度レコードでは、特に安定度の高い盤質が必要とされますが、従来から高品質用として開発した材料をベースに、新タイプの配合剤、熱安定効果の高い安定剤の組合わせにより、一層ゲル化性の改善を図り、更に新タイプ帯電防止剤による静電除去効果とあいまってきわめて安定度の高いS/N比の良いレコードを提供することが出来ました。

以上のように今回の DAM レコードは、現状の最高水準の製盤プロセスを経て制作されております。

デジタルサウンドとの出会いも最近は多くなって来ていると思いますが、是非、このアナログディスクのもつサウンドの魅力に十分に感じ取って頂ければ幸いに思います。

(開発技術部 原 清介)

30センチ45回転レコードの 取扱いについて

このレコードは、通常の33 $\frac{1}{3}$ 回転レコードと変わった点はありませんが、念のため次のことに御注意下さい。

- (1)オートプレーヤー、オートチェンジャーでも使用できますが、ある特殊なものでは完全な自動演奏が出来ないこともあります。このような場合、手動方式に切替えてお取扱下さい。
- (2)回転が速くなるために、レコードの反りの影響が33 $\frac{1}{3}$ 回転にくらべて出やすくなります。レコードの保管、取扱いには充分注意をして下さい。
- (3)再生する部屋の温度が低いと、カートリッジが正しく動作しないことがありますのであらかじめ室温を15℃~20℃位に保って下さい。
- (4)再生時には特にアームのラテラル、インサイドフォースのバランス、及び再生針の磨耗状態、針圧(メーカー指定の重い方にセット)には充分気を付けて下さい。
- (5)このレコードは、ハイクオリティのオーディオ・チェック・レコードのため、カートリッジによってはトレースがむずかしい場合があります。

レコード材質——プロユース材料使用

カッティング・データ

Cutting Date : 27 January 1988
Toshiba-EMI STUDIO TERRA
CUTTING ROOM
Tape Recorder : AMPEX ATR-102 (1 $\frac{1}{2}$ Inch 76cm/sec. 2ch)
Drive Amplifier : Neumann SAL-74B
Cutting Lathe : // VMS-80
Diamond Cutting Stylus
Cutting Head : Neumann SX-74
(ヴァンデンハル改造バージョン)
Non Limiter
Non Equalizer

スタッフ

監修	: 伊藤 強
プロデューサー	: 平形忠司、小山正敏
ディレクター	: 出口敏彦
ミキシング・エンジニア	: 小菅憲一
アシスタント・エンジニア	: 田中照雄(タムコ)
サウンド・エンジニア	: 原 清介、田口庄司
カッティング・エンジニア	: 竹内昭五
デザイン	: 株式会社グラバー企画
フォトグラファー	: 伊藤 隆
録音場所	: 日本都市センターホール
録音年月日	: 1987年4月25日
録音協力	: 株式会社タムコ (マルチ・レコーディング・モービル No.3)
制作協力	: 株式会社サンデュエット
企画・制作	: 第一家庭電器株式会社 DAMPC
製造	: 東芝EMI株式会社